

2016 年度

「言語文化演習(リービ英雄ゼミ)」卒業論文

1970 年代

**デンマークポルノ映画が
ドグマ 95 に与えた影響**

法政大学国際文化学部国際文化学科

チェ・ブンブン

目次

はじめに.....	p3
第 1 章 デンマークの歴史.....	p4
1.1 デンマークの誕生.....	p4
1.2 内乱の時代.....	p5
1.3 欧州動乱の渦中のデンマーク.....	p6
第 2 章 デンマーク映画の歴史.....	p7
2.1 映画史初期とデンマーク.....	p7
2.2 第二次世界大戦におけるデンマーク.....	p8
2.3 戦後デンマーク映画.....	p9
2.4 ドグマ 95 とデンマーク.....	p10
2.5 ポストドグマ 95 の動向.....	p12
第 3 章 1970 年代デンマークポルノ映画研究.....	p14
3.1 日本の研究事情.....	p14
3.2 デンマークのポルノ映画史の始まりと終焉.....	p15
3.3 デンマークポルノ映画の分類.....	p19
3.3.1 ドキュメンタリータッチ.....	p19
3.3.1.1 『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな日(1970)』.....	p19
3.3.1.2 『痴情の沼(1970)』.....	p20
3.3.1.3 『性私刑』.....	p20
3.3.1.4 『サーカス・ポルノ(1973)』.....	p21
3.3.1.5 文献より 『WHY?獣色(1970)』『秘技ポルノ性史(1971)』.....	p21
3.3.2 フィクション.....	p21
3.3.2.1 『新わたしは女(1970)』.....	p21
3.3.2.2 『歯科医・性の実験報告(1971)』.....	p22
3.3.2.3 『痴漢ドワーフ(1974)』.....	p22
3.3.2.4 『淫夢(1974)』.....	p23
3.3.2.5 『白昼スワップ・午後の欲情(1975)』.....	p23
3.3.3 1970 年代デンマークポルノ映画総括.....	p24
3.4 デンマークポルノ映画の影響.....	p24
第 4 章 結び.....	p26

注.....	p27
参考文献.....	p29

はじめに

本稿は、1970 年代にデンマークで大量生産され、デンマーク国内だけでなくヨーロッパ、アメリカ、日本でも公開されたデンマークポルノ映画の変遷から、1990~2000 年代の映画運動・ドグマ 95 に与えた影響を考察していくことを目的とする。

デンマーク映画研究は、映画史初期のカール・テオドール・ドライヤーやベンヤミン・クリステンセンの時代、1990 年代にラース・フォン・トリアーとトマス・ヴィンターベア主導で始まったニューウェーブであるドグマ 95 の研究が主となっている。しかしながら、この 2 つの時代の狭間である 1930 年代後半~1970 年代に関してはほとんど研究されておらず、文献でもごく僅か程度しか述べられていない。それによると、デンマークでは第二次世界大戦中、ドキュメンタリー映画製作に力を入れていた。戦後、娯楽作品に力を入れるものの、興行収入が伸び悩み映画産業は斜陽に陥る。1969 年にデンマーク政府は映画の検閲を廃止。ポルノ映画を解禁すると同時にポルノ映画大量生産の時代が始まり、1970 年代にはデンマーク国内だけでなく海外に輸出。日本でもデンマーク製ポルノ映画は公開された。1970 年代ポルノ映画史に関して、日本では小松弘著『北欧映画完全ガイド』のコラムページ僅か 1 ページしか詳細が言及されていない。2016 年に長澤均が書いたポルノ映画史に関する文献『ポルノ・ムービーの映像美学 エディソンからアンドリュー・ブレイクまで 視線と扇状の文化史』にもほとんど言及されていない状況である。

しかし、1970 年代には日本で 15 本のデンマークポルノ映画が公開され、さらに当時日本で公開されたデンマーク映画は 1979 年に公開されたカール・テオドール・ドライヤー監督の『奇跡(Ordet,1955)』を除き総てポルノ映画であることが分かっている。つまり、ジャンル映画としてデンマークポルノ映画は社会的地位を獲得していたにも関わらず、日本のデンマーク映画研究では軽視されていた。これほどまでにジャンルムービーとして成功を収めたデンマークポルノ映画は、後世のデンマーク映画史に何らかの影響を与えた筈である。現に 1970 年代デンマークポルノ映画研究を行ったモーテン・シングは『DANSK PORNO/DANISH PORN』で、ラース・フォン・トリアーの作品に影響を与えたと言及している。ともすれば、彼が始めた運動・ドグマ 95 の作品群にも影響を与えたのではないだろうか。そこで本稿では、1970 年代のデンマークポルノ映画史を紐解くと共にデンマークポルノ映画がドグマ 95 に与えた影響を考察していく。

デンマークは映画史を含め、アメリカやフランスの文化史研究と比べると研究は進んでいない。つまり本稿を書くにあたり、大まかな歴史や文化について言及する必要がある。そこで第 1 章ではデンマークの歴史について述べる。第 2 章ではデンマーク映画の歴史全体について述べる。そして、第 3 章では 1970 年代デンマークポルノ映画史を国内外にある文献・映像資料の調査結果を基に明らかにいき、ジャンル映画としてデンマークポルノ映画の特徴を体系化した上でデンマーク映画史に与えた影響を論じていく。そして第 4 章では結論と、残された課題について言及していくものとする。

第 1 章 デンマークの歴史

1.1 デンマークの誕生

まず、映画史について語る前にデンマークについて言及する必要がある。デンマークはヨーロッパ北部にある大小 483 に及ぶ島から成り立っている。大きさは九州ほど、人口は 2016 年時点で約 570 万人と兵庫県ほどの国である。野村武夫著『「生活大国」デンマークの福祉政策』によると、「国土の大半が肥沃で平坦な氷堆石(モレーン)による丘陵性の大地が広がっており、そのうえデンマークの最高地点が約 170 メートルしかないため、国土の 90%が耕作に地に適している。(中略)カリブ海から流れて沿岸をめぐる暖流(北大西洋海：通称メキシコ湾流)のおかげで最も寒い 2 月で平均気温がマイナス 2 度程度、最も暑い 7 月でも平均気温 17.8 度である。したがってヨーロッパ北部に位置するとはいえ、比較的穏やかな気候に恵まれている。デンマークが世界有数の農業国となった原因としては、このような地理的条件に恵まれたことが大きい^{注1)}とのこと。ほとんど同緯度であるロシアの 2 月の平均気温がマイナス 10 度であることから比較的温暖と言える。母国語はデンマーク語で、主要宗教は福音ルーテル派である。福音ルーテル派とは、マルティン・ルターを主導としたプロテスタントである。

デンマークの誕生は 8 世紀頃と言われている。浅野仁、牧野正憲、平林孝裕編「デンマークの歴史・文化・社会」によると次のように解説されている。

「**ダンマーク(Danmark)** [デンマーク] はデーン人のマルク(marc)の意味で、また『マルク』という語の古い意味は、人の住まない境界地域であることから、ここでのマルクはユラン半島の最南部に広がる荒野の地域であったと思われる。一地方の名に過ぎなかったこの『デーン人のマルク』が、次第にデーン人の居住域全体に適用されるようになったのである。この現象は 900 年以前に生じていた、と推測されている。というものも、アングロ=サクソン人のアルフレッド大王(在位 871-899)の翻訳書に、文献上初めてデンマークという名称が現れているからである。^{注2)}

当時のデンマークは、ヴァイキング時代であり、見知らぬ国へ航海を行い、略奪を行った。ヴァイキングが他の土地で略奪を行った背景について諸説あるが、主に一夫多妻制による人口増加説、商業技術の未整備による海賊行為の横行説が有力だとされている。

デーン人からなるヴァイキングは、イングランドやフランスの文化や技術等を略奪した。そして、宗教も自国に取り入れた。かつてデンマークではアース神を信仰していたのだが、ヴァイキングの中にはキリスト教徒へ転身する者も多かった。ヴァイキングは当時

1 『「生活大国」デンマークの福祉政策』、p2、7~16 行目より引用

2 『デンマークの歴史・文化・社会』、p15 23 行目~p16 6 行目より引用

の北欧政治も牛耳っていたため、やがてデンマークの人々はキリスト教徒へ転身していった。拍車をかけるように、キリスト教会は勢力拡大するべく北欧にアプローチを仕掛ける。例えば、フランスの修道院で育ったアンスガー(Ansgar,801-65)は数度にわたりデンマークやスウェーデンを訪れ、布教活動を行い、後にハンブルクの大司教になった彼は、当時ヴァイキングが奴隷として扱っていたデンマーク人の少年達を買収する形で解放。解放された少年達にキリスト教教育を施した。

そして、次第にデンマークの人々がキリスト教徒化していく中、さらにその動きを加速させる出来事が発生した。11 世紀、オーロフ王(Oluf I Hunger,?-1095,位 1086-95)が統治する時代、長年に渡る大飢饉に見舞われた。人々は、全時代の王で敬虔なキリスト教徒のクヌーズ聖王(Knud,1095?-1131)が聖職者たちを賄う為に課した穀物やバター、卵といった食物に対する税に反発し殺した罰だと考えるようになる。そしてクヌーズ聖王を評価するようになり、キリスト教への理解も浸透した。

1.2 内乱の時代

しかしながら、デンマークでは内乱と侵略により不安定な時代が長く続いた。オーロフの弟の息子クヌーズとオーロフの弟ニルス(Nils,?-1134,位 1104-34)の息子マグヌス(Magnus,?-1134)による政権争い、スラブ人移民ヴェンド人の襲撃で国は衰弱していた。12 世紀後半、ヴァルデマ大王(Valdemar I den store,1131-82,位 1157-82)が積極的なヴェンド人の侵略に対し応戦。和平協定を結び、ようやく平和の時代が訪れた。荒れ地を開墾し、敵の侵略を防ぐためにシェラン島南部ヴォーディングボーや小さな漁村ハウンにまで砦を築きあげた。そして、国力を上げていき、1219 年にエストニアを征服。北ドイツも支配に成功しデンマークは「バルト海の覇者」と呼ばれるようになった。14 世紀になると、ハンザ諸都市がデンマークを敵視するスウェーデン等を取り込み 77 都市に及ぶ大同盟を結び再び苦境に立たされる。対抗すべく 1397 年、デンマークはスウェーデン、ノルウェーとカルマル同盟が結ばれ、有事の際に支援し合う関係を構築した。

15 世紀に入るとグーテンベルク(Johannes Gutenberg,1398-1468)が活版印刷術を発明、1495 年に『デンマーク韻文年代記』がデンマーク初の書物として出版される。活版印刷術のおかげで、聖書も庶民の手に渡るようになった。そして、16 世紀初頭、教会に対する批判が集まるようになった。そして、サン・ピエトロ大聖堂建築費用を集める為に、贖宥状を販売することに対し、マルティン・ルター(Martin Luther,1483-1546)を中心に批判の声が強まり宗教改革が始まった。ルター派のクリスチャン 3 世(Christian III, 1503-1599, 位 1534-1559)がデンマーク王に就いたことから、本国でも宗教改革が積極的に行われた。まず、カソリックの司教を投獄。教会の礼拝・歌唱はラテン語からデンマーク語に変更となった。この改革以後、デンマークの国教は現在に至るまで福音ルーテル派となった。やがてカソリックとプロテスタントの軋轢は大きな溝を生み、1618 年からヨーロッパ広範囲

に及び三十年戦争が勃発した。当時デンマーク王であった、クリスチャン 4 世 (Christian IV, 1577-1648, 位 1588-1648) はルター派であった為、プロテスタント側についていた。30 年にも及ぶ長い戦争で国力は疲弊し、終戦後国土の多くが無人となり、デンマークは多大なる債務も抱えることとなった。そこで 1660 年、フレゼリク 3 世 (Frederik III, 1609-70, 位 1648-70) は世襲王国となり、全国民から税を徴収するシステムを構築。新態勢で新しい時代を迎えようとした。しかし、新体制は成功しているとは言い難いものであった。戦争にはいくつか勝利はしていたものの、官僚は汚職にまみれ、街にはゴミが溢れる。本が徹底的に検閲されデンマークの文化は退行していた。その一方でクリスチャン 7 世 (Christian VII, 1749-1808, 位 1766-1808) が専属の医者ドイツ人医師ストルーウンセ (Johan Friedrich Struensee, 1737-72) と共に出版の自由、拷問の廃止を行い、少しずつデンマーク情勢は改善されていった。

1.3 欧州動乱の渦中のデンマーク

デンマークに平穏が訪れる 19 世紀、今度はナポレオンがヨーロッパ侵略を活発化させ、フランスとイギリスが対立する構造が生まれる。そしてデンマークはどちら側の味方につくかで苦渋の選択を迫られる。そして、イギリス側につくことを決断したデンマークであったが、イギリス側の誤解により、デンマークが敵視され砲撃、窮地に立たされた。ナポレオン軍の救済により、征服こそ免れたものの、ノルウェーを失う。また、多額の借金を抱え、国内ではインフレが横行。イギリスがデンマークの産物を締め出したことで、長年貧しい状況を抜け出せずにいた。貧しい国故に、周辺諸国の様子を伺う外交が中心を占めるようになり、時としてヨーロッパ情勢の渦中へ飲み込まれるようになる。第一次世界大戦において、デンマークは、中立の立場に立ち、食料をドイツ、イギリスに提供した。またノルウェー、スウェーデン政府と会談を開き、スカンジナビア諸国の連帯を図った。1929 年アメリカから始まった世界恐慌により、不況の波がヨーロッパにも押し寄せると、デンマークの食料品輸出货量が激減し農業危機が発生する。

ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) 台頭により、1940 年デンマークはナチス・ドイツに占領される。ドイツ軍に抵抗するべくレジスタンスが結成されたものの、密告者により粛清され、またユダヤ人狩りで多くの国民が犠牲となった。戦後、デンマークはアメリカのマーシャル・プランによる援助で少しずつ復興を目指す。世界恐慌時に不況対策として、スタインケ社会大臣 (Karl Kristian Steincke, 1880-1963) が築き上げた社会保障制度を守り着実に成果を上げてきた。徹底的な所得再分配と工業に政府は力を入れた。野村武夫著『『生活大国』デンマークの福祉政策』によると「1950 年代後半から 60 年代には平均経済成長率が年 5% に達するという黄金期を迎えた。^{注3)}」とのこと。また、1960 年代に介護が必要な高齢者用の老人ホームのような施設「プライイェム」が整備されたことで、次第に福

3. 『『生活大国』デンマークの福祉政策』、p19 20~21 行目より引用

社が整っていった。そして、1978 年「男女雇用平等法」制定により女性の地位が向上。地方分権化を積極的に行うことで、公共サービス事業の雇用創出に繋げた。そして、1993 年に EU に加盟するものの、福祉サービスの質を維持するためにユーロ導入を見送った。2012 年、2013 年連続、国連の持続可能な開発ソリューション・ネットワークが発表する世界幸福度ランキングで 1 位を獲得し、2015 年は 3 位へと下落するものの、2016 年には再び 1 位に返り咲き、国民の多くが幸福を感じている国となった^{注4}。近年福祉国家の質低下を防ぐため、移民や難民の受け入れをレバノン等の規制するようになり、昨年 9 月、移民・統合・住宅省はレバノンの新聞に難民流入阻止広告を載せ、物議を醸した。

つまり、デンマーク映画史を総括すると、今となっては幸福度ランキング上位であり、且つ福祉国家という「幸福」のイメージが強い国だが、それは氷山の一角に過ぎず、常に侵略の歴史にさらされており、国内が荒廃としていることが分かった。次章では、デンマーク映画史のアウトラインについて述べていく。

第 2 章 デンマーク映画の歴史

2.1 映画史初期とデンマーク

デンマークは映画史全体で見ると、映画先進国である。フランスで映画が誕生し、数年後には既に国内初の映画を製作、そしてフランスに次いで 2 番目に映画会社を作った。この時代のデンマーク映画は、カール・テオドール・ドライヤー(Carl Theodor Dreyer,1888~1968)とベンヤミン・クリステンセン(Benjamin Christensen,1879~1959)という監督が、様々な実験的技法を映画に取り込み、デンマーク映画は国内外で高い評価を受けていたのである。一方、大衆映画はフリークスや人種差別を扱ったコメディが大半を占めていた。この節では、1930 年代までのデンマーク映画史を芸術映画と大衆映画双方から解説する。

1895 年にリュミエール兄弟が最初の映画『工場の出口(La Sortie de l'usine Lumière à Lyon ,1895)』を公開してから 2 年後に、デンマークで最初の映画『Kørsel med grønlandske Hunde(1897)』が誕生した。そして 1904 年、デンマーク初の映画館が創設されると映画館建設ブームが起り、映画会社ノーディスク社も創設された。ノーディスク社は『デンマークを知るための 68 章』、小松弘の記事によると「現在でも継続して映画を製作している映画会社としては、実際フランスのゴーモンに続いて世界で二番目に古い会社である。^{注5}」とのこと。また、カール・テオドール・ドライヤーとベンヤミン・クリステンセンが絵画を意識した撮影技法で、宗教的作品を多数作り出した。カスパーチューベアの論文によると『サタンの書の数頁(BLADE AF SATANS BOG,1919)』について、「映

4 「WORLD HAPPINESS REPORT」2013 版,2015 版を参考

5 『デンマークを知るための 68 章』、p290 6~8 行目より引用

画の最後の晩餐の場面が、同じ場面の最も有名な絵画、1498年にレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452~1519)によって描かれたミラノのフレスコ画によく似ていることは明らかである。^{注6}と述べている。と同時に、ショッキングな描写も描いていた。『魔女(HAXAN, 1922)』や『裁かるゝジャンヌ(La Passion de Jeanne d'Arc, 1929)』では、どちらも絵画的な撮影技法に、時折拷問や悪夢的シーンが挿入されている。

大衆映画としては、1910年に誕生した映画会社ダンマーク社が製作した作品群がある。小松弘監修『北欧映画 完全ガイド』によると「ダンマーク社の作品のほとんどはサーカスや曲芸飛行やダイビングなどを見所とした犯罪映画や戦争映画のジャンルで、いわばセンセーショナルな見世物を売り物にする、きわもの映画とでもいえるようなものであった。当時はそうした傾向が映画の観客には新しい感覚を与えてくれた。^{注7}」とのこと。つまり、デンマーク映画の黄金期が終焉を迎えるにつれ、大衆映画はきわもの映画を娯楽として作るようになった。ノーディスク社は国内の作品を輸出すべく、ディケンズやノーベル賞作家であるゲアハルト・ハウプトマン(Gerhau Hauptmann, 1862-1946)の文芸作品を映画化するようになるものの、基本的には低俗なコメディ映画が1930年代まで続く。

1930年代のコメディとしてDFIは例を示している。ラウ・ラウリッツェン監督が手がけた『Barken Margrethe(1935)』は航海に出た船乗りを描いたコメディであるが、人種差別的描写があるとのこと。社会的情勢を受け、プロパガンダ色を強めたコメディがこの時代に登場した。

2.2 第二次世界大戦におけるデンマーク映画

1940年4月にデンマークがナチスに占領されると、1913年以降デンマークが国で管理していた映画産業をドイツによって奪われてしまう。つまり、デンマーク国内で映画製作が制限される且つ連合国からフィルムを輸入することは禁じられてしまった。一方で、デンマークのレジスタンスを中心にドキュメンタリー映画製作が盛んとなり、ゲリラ的に劇場で上映された。この節では1940年代のデンマーク映画について言及する。

1940年4月にデンマークはナチスに侵略される。そしてメディアが統制され、映画もナチス・ドイツの管理下となる。そのような、ナチスの進行に対抗するかの如く、英国と大陸の地下組織との通信としてオランダを始め映画が使われるようになる。デンマークの地下組織でも、この時期ドキュメンタリーが盛んに作られるようになる。ナチスによる被害を強烈な映像を、モンタージュ効果を巧みに使って描いた『Danmark Fights for Freedom(1944)』戦後に再編集して作られた『きみの自由がかかっている(Det gælder din Frihed, 1946)』などがある。若者のそして、エリック・バーナウ著『ドキュメンタリー映

⁶ 『際立つ構成-デンマークのサイレント映画における視覚的モデルとしての絵画の使用(カスパーチューベア著)』、p102 33行目~p103 2行目より引用

⁷ 『北欧映画 完全ガイド』、p194 下段 22行目~p195 上段 5行目より引用

画史』によると、「ときには突撃隊式に映画館を襲撃し、映写技師を脅して地下組織の映画を上映させることもあった。出入り口を見張りながら、突撃隊員たちは観客に座って映画を観るように言う。映画が終わると、フィルムを回収して姿を消す訳だ」⁸とのこと。それらの作品は国外に持ち出されて外国にデンマークの現状を伝える役割を担っていた。

2.3 戦後デンマーク映画

この節では第二次世界大戦後のデンマークから 70 年代のデンマーク映画史について書く。この時代はナチス・ドイツの占領から解放されたデンマークが、再び映画という文化を構築していくのだが、映画業界は衰退の一途をたどり、デンマーク政府は苦肉の策としてポルノ映画の製作及び配給を全面的に解禁した時代といえる。そして 1970 年代デンマークポルノ映画は国内外で流行なり、1980 年代デンマーク政府が若手インディーズ映画に対する支援を打ち出すまでは低俗な作品が大半を占める状況となっていた。

第二次世界大戦終了後、デンマークは再び国内向け娯楽作品を中心に製作した。しかし、テレビの普及で映画産業が世界的に衰退し、デンマークもその煽りを受けた。ノーディスク社は映画製作だけでは経営が厳しいと考え、デンマーク第二のテレビ会社 TV2 を設立しテレビ放送に力を入れるようになった。デンマーク政府も 1969 年に映画検閲を廃止して、ポルノ映画を解禁。1970 年代からスウェーデンと並び、ポルノ映画に力を入れ始める。そして、その官能性が国際的に評価され、1970 年代には『ヘンリー・ミラーの性生活 / クリシーの静かな日々 (Stille dage Clichy, 1970)』『サーカス・ポルノ (La foire aux sexes, 1973)』などといった 15 本のデンマークポルノ映画が日本でも劇場公開された。この時期のデンマーク映画は、従来のドライヤーやクリステンセンといったアート映画よりも、ポルノ映画大国として、ポジショニングを行った。小松弘によるとデンマークのポルノ映画はスウェーデンのポルノ映画に対し「陽気で、セックスをコメディとして描くことが多かった」⁹とのこと。結局、1970 年代、前衛的なポルノ製作が盛んになったデンマーク映画界からは、アカデミー賞や、カンヌ、ベルリン、ヴェネチアといった映画祭にデンマークの名が挙がることはなかった。

そのような、デンマーク映画史を変える出来事が 1987 年に起こる。『アムール (Amour, 1970)』、『秘技ポルノ性史 (Med kærlig hilsen, 1971)』、『性歴 2000 年 (WITH LOVE, 1972)』とポルノ映画を製作していたガブリエル・アクセル (Gabriel Axel, 1918~2014) が、イサク・ディーネセン (Isak Dinesen, 1885~1962) の小説を映画化した『バベットの晩餐会』がアカデミー賞外国語映画賞を受賞。翌年のアカデミー賞でも同部門でデンマーク映画『ペレ』が受賞して以降、デンマーク映画は一気に注目を集めた。

⁸ 『ドキュメンタリー映画史』、p165 下段 19 行目～p166 上段 1 行目より引用

⁹ 『北歐映画 完全ガイド』、p68 4 段目 19~20 行目より引用

2.4 ドグマ 95 とデンマーク

『バベットの晩餐会』、『ペレ』でアート系デンマーク映画が世界的に有名になりつつあったデンマーク映画界をさらに波に乗せる運動が 1995 年に起きる。それはドグマ 95 である。ドグマ 95 とは、ラース・フォン・トリアー(Lars von Trier,1956~)とトマス・ヴィンターベア(Thomas Vinterberg,1969~)が提唱した運動である。従来のデンマーク映画を批評し、ストーリーや俳優の演技に着目した作品作りを目標としている。ドグマ 95 では、「純血の誓い」と呼ばれる 10 の制約下で映画作りをすることが求められ、『セブレレーション(Festen,1998)』、『ミフネ(Mifunes sidste sang,1998)』などといったドキュメンタリータッチな作品が多数登場した。これらの作品は事務局を通じて承認作業が行われ、この運動は 2002 年に事務局が閉鎖。正式にドグマ 95 の承認を受けた作品は 1998 年の『セブレレーション』から 2004 年の『Cosi x caso(2004)』までの 35 本にとどまった。この節では、ドグマ 95 成立から解体までの経緯を掘り下げていく。

まず、前提としてドグマ 95 の創始者、ラース・フォン・トリアー監督について整理する必要がある。彼は、1980 年代『バベットの晩餐会』、『ペレ』世界的にデンマーク映画が注目を集める中に現れた監督である。彼は『メランコリア(Melancholia 2011)』、『アンチクライスト(Antichrist,2009)』、『ニンフォマニアック(Nymphomaniac,2014)』と挑発的なタイトルとセンセーショナルな映像で描く作品を作り続けた。トリアー監督の実験精神は時として俳優を傷つける。このことは、『ラース・フォン・トリアーの 5 つの挑戦(De fem benspænd The Five,2003)』、『メイキング・オブ・ドッグヴィル~告白~(Dogville Confessions,2003)』で確認できる。また、『メランコリア(2011)』がカンヌ国際映画祭に出品された際、ナチス擁護発言をし、追放された。しかしながら彼の前には、シャルロット・ゲンズブール(Charlotte Gainsbourg,1971~)やステラン・スカルスガルド(Stellan Skarsgård,1951)等世界の役者が集まってくるカリスマ性を有している。トリアー監督は『ヨーロッパ(Europa,1991)』でカンヌ国際映画祭審査員特別賞を獲り、既に娯楽作品路線へ転向していたノーディスク社に対して、1992 年にアート系路線のツェントロパという映画会社を設立する。

そしてドグマ 95 は誕生した。1995 年、当時デンマーク国立映画学校を卒業したばかりのトマス・ヴィンターベアと共に新しい映画運動ドグマ 95 を開始したのである。この運動はテレビシリーズ『キングダム(Riget,1994)』で実験的に使用した、ドキュメンタリータッチや人為的照明を排除した演出を体系化したものである。そしてクリスチャン・レヴリング(Kristian Levring,1957~)とソーレン・クラーク＝ヤコブセン(Søren Kragh-Jacobsen,1947~)と共に「純血の誓い」と呼ばれる 10 個の制約下で作品作る作家集団を形成した。キネマ旬報社出版の『現代映画用語事典』によるとその 10 個の制約は下記の通りである^{注10}。

10 『現代映画用語事典』、p103 右段 42 行目~p104 左段 12 行目より引用

- 1:撮影はロケーションのみで行う、小道具やセットは作らずに現状の撮影場所を選ぶ
- 2:現場で流れている音響・音楽以外は使用しない
- 3:カメラは手持ち
- 4:カラー映画で、人為的な照明は使わない
- 5:オプチカル処理やフィルターは使わない
- 6:(殺人や兵器など)表面的な行動は盛り込まない
- 7:時間的・地理的な乖離は許さない(現前の事象を撮り回想場面を使用しない)
- 8:ジャンル映画ではない
- 9:フィルムのフォーマットはアカデミー35 ミリ・スタンダードサイズ
- 10:監督名をクレジットに載せない

その制約の下、『セレブレーション』『ミフネ』『幸せになるためのイタリア語講座 (Italiensk for begyndere, 2001)』が作られカンヌ国際映画祭やベルリン国際映画祭で受賞、見事成功を収め、デンマーク映画の新しい波が到来する。ここでいくつかドグマ映画の作品を読み解いていくとする。ドグマ映画第一作目『セレブレーション』、これは、ある資産家の還暦パーティーでのスピーチで男が自分と妹がその資産家から幼少期にレイプされたことを告白したことから、パーティーに憎悪が渦巻き破滅を迎えるという話である。手持ちカメラによる喧嘩のシーンの荒々しさ、まるで観客もパーティーにいるような気分させられる映像が繰り返される。フランスのヌーヴェルヴァーグ、日本の松竹ヌーヴェルヴァーグ、ブラジルのシネマ・ノーヴォと様々な国の映画における「新しい波」は、ドキュメンタリータッチで描かれる傾向があるがデンマークも同様である。しかしながら、デンマークは決定的に、悲劇やスキャンダルに重きを置いている。悲劇という物語の中で役者が自分の演技をいかに最大限に活かせるかが焦点になっているケースが多い。『ミフネ』では貧しい村に久しぶりに戻ってきた男が知的障がい者である兄の面倒を見ることとなり、殺すか否かを悩む話。『イディオッツ (Idiots, 1998)』では、知的障がい者になりすまし、人々の偽善を暴いていくという内容。『幸せになるためのイタリア語講座』という一見、スキャンダルとは無縁なタイトルのこの作品ですら登場する人物は妻を亡くしている男や、アルコール中毒者の母親を抱える美容師など絶望の淵に立たされている人である。

このようにして、始まったドグマ 95 だが、中心人物であるラース・フォン・トリアー監督が『イディオッツ』の次作にあたる『ダンサー・イン・ザ・ダーク』では完全にドグマ 95 的映画作りから撤退していたこともあり、運動は下火になる。そして 2002 年にドグマ 95 を管理する事務局が閉鎖したことで実質の終わりを迎えた。最終的に、事務局に正式に認可されたドグマ映画は 1998 年の『セレブレーション』から 2004 年の『Cosi x caso(2004)』までの 35 本である。

2.3 ドグマ 95 以降の動向

ドグマ 95 以外にも、ドキュメンタリータッチや人為的照明を排した作品は存在した。また 2002 年にドグマ 95 の事務局が閉鎖し実質の終わりを迎えた以後も、これらの作品の手法を踏襲した作品が多く作られるようになった。この節では、1990 年代以降のドグマ 95 以外の作品について書く。

まず、ドグマ 95 以外の 1990 年代デンマーク映画について語る。デンマークの映画研究家アンデルス・トフトガールドとイアン・ハルヴダン・ホークスウォース著

『NATIONALE SPEJLINGER Tendenser i ny dansk film(国民の投影 デンマーク映画の動向)』によると、『モルグ/屍体消失(Nattevagten,1994)』がデンマーク映画特有のアート性とアメリカ映画特有のジャンル性を併せ持ったスタイルを取り、46.5 万枚ものチケットセールを記録している。これは、デンマーク統計局によると 1994 年の国産映画のチケット販売数が年間 231.8 万枚だったことを考えると約 20%の売り上げを占めている計算となり大ヒットと考えられる。ここで語るデンマーク映画特有のアート性とは、ドキュメンタリー性である。『モルグ/屍体消失』では、屍体保管所で男女が性交を行う様子を隠しカメラ視点で描かれている。まるで、ある人の人生をのぞき見している点に、虚構ながらも現実に近い演出をするデンマーク映画の特徴がにじみ出ている。

そして 1990 年代後半のデンマーク映画は、『モルグ/屍体消失』のヒットに触発され、アメリカの 2 つのジャンルを意識した作品が大量生産されるようになる。一つ目は、アクション映画だ。アメリカ映画特有の激しい暴力映画に触発され、『Ondt Blod(1996)』や『プッシャー(Pusher,1996)』等の作品が生み出された。そして、アメリカ映画の真似をするだけでなく、手持ちカメラを使った撮影。物語の舞台をデンマークの犯罪地域に定めるといったドグマ映画で用いられた手法が多用され、デンマーク映画としての個性を獲得していった。

二つ目は、ラブストーリーである。階級や身分の違う女男が、互いに愛し合う者の、これらの仕来りに邪魔をされ、結ばれない葛藤を描いた王道のストーリーテリングを 1990 年代以降のデンマークでは、パレスチナやトルコから来た移民間の物語へと落とし込んで大量生産していった。

2000 年代以降のデンマーク映画はドグマ 95 の国際的成功を受け、デンマーク映画としての色を全面に押し出した作品が登場する。2002 年にドグマ 95 は事務局が閉鎖し消滅したが、この映画運動によりデンマークのクリエイターは自らの技術を伸ばしていき、ラーズ・フォン・トリアー、トマス・ヴィンターベアはもちろん、後に『未来を生きる君たちへ(2011)』でアカデミー賞外国語映画賞を受賞するスサンネ・ピア監督を育てた。そして、トリアー監督が『イディオッツ』『ダンサー・イン・ザ・ダーク(Dancer in the Dark ,2000)』と暴力的、性的、あるいは悪趣味な作品を作り続け影響されたように、今後大量にデンマークでセンセーショナルな映画が製作され、しかも国外の主要映画祭のコン

ペティションに選出され、受賞頻度も上がった。

そして、ドグマ 95 の運動が終わり 10 年以上経った。ドグマ派以外の作家も世界各国の賞で話題を集めるようになってきた。例えば、ニコラス・ウィンディング・レフン監督は、『プッシャー』三部作や『ブロンソン(Bronson,2008)』といった若者向け暴力映画を作った後、『ドライブ(Drive,2011)』でカンヌ国際映画祭にて監督賞受賞している。『アクト・オブ・キリング(The Act of Killing,2012)』がベルリン国際映画祭 2 冠、その続編にあたる『ルック・オブ・サイレンス(The Look of Silence,2014)』がヴェネチア国際映画祭で 5 冠を受賞しドグマ映画以外でもデンマーク映画の評判が高まっている。インディーズ映画でも、アフガニスタンを舞台に平和維持活動をしていた軍人を巡る法廷劇『ある戦争(Krigen,2015)』はアカデミー賞外国語映画賞にノミネートされ、若者の集団自殺をテーマにした『Bridgend(2015)』がヨーテボリ映画祭で特別賞を、没落したかつて裕福だった女と介護することとなった娘との確執を描いたドキュメンタリー『THE GOOD LIFE(2015)』がカルロヴィ・ヴァリ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞するなど高い業績を収めている。

そして、従来のデンマーク社会あるいは普遍的世界が舞台の映画から飛躍するようになった。特に注記すべき点は、スサンネ・ピア監督がハリウッドで製作した『SERENA(2014)』、クリスチャン・レヴリング監督の『悪党に粛清を(2015)』である。どちらもデンマーク人製作の西部劇であり、マカロニ・ウエスタンに負けない暴力と残虐が描かれている。

また、デンマーク社会の闇をにわかに暗示させてきたデンマークがデンマーク史のタブーと向かい合い始めたのもごく最近のことである。『ロイヤル・アフェア 愛と欲望の王宮(En kongelig affære ,2012)』では、クリスチャン 7 世の妻カロリーネ・マティルダとドイツ人医師ストルーウンセの不倫というスキャンダルを、歴史の教科書とは別の角度で描いている。『デンマーク国民をつくった歴史教科書』では、ストルーウンセをクリスチャン 7 世の病につけ込む悪役として記述されている。デンマークの中学校教科書である『デンマークの歴史教科書 古代から現代の国際社会まで』ではこのスキャンダルについて触れられていない。映画では、クリスチャン 7 世、カロリーネ・マティルダ、そしてストルーウンセを対等に描き、国を動かす者の葛藤を強調し、従来のデンマーク人の見方を変えた。『ヒトラーの忘れもの(Under Sandet ,2015)』では、第二次世界大戦終戦後、デンマーク人がドイツの少年兵に、海岸沿いに埋められた地雷を撤去させた非人道的歴史を暴いた。

デンマーク映画史を観察すると、1970 年代にポルノ映画が解禁となって以降からデンマーク映画はある種のジャンル映画としての特色が強まったのではと考察することができる。当然ながらドグマ 95 はジャンル映画ではないと宣言されている。しかしながら、ドキュメンタリー性や暴力描写に一定のベクトルがあるのではないだろうか。つまり、現代デンマーク研究をする上で基礎に当たる 1970 年代デンマークポルノ映画について掘り下

げる必要がある。本稿では、1970 年代デンマークポルノ映画とドグマ 95 との関係性のみを取り上げる。次項では 1970 年代デンマークポルノ映画史についてさらに掘り下げていく。

第 3 章 1970 年代デンマークポルノ映画史

3.1 日本の研究事情

本稿を書くに当たり、先行研究を調査する必要がある。論文検索サイト CiNii で「デンマーク 映画」と検索したところ 5 件の論文がヒットした。しかしながら、これらの論文の中には本稿で扱う 1970 年代デンマーク映画について言及するものは存在しなかった。また、「デンマーク ポルノ」と検索したところ該当文献は同様に見つからなかった。次に、デンマーク映画史を扱った文献を調査した。『デンマークを知るための 68 章』や『北欧映画完全ガイド』、『ポルノ・ムービーの映像美学』といった文献が見つかった。しかしながら、ほとんどが 1970 年代のデンマークポルノ映画に対し言及を回避しており、唯一『北欧映画完全ガイド』の小松弘著「映画と性解放とポルノグラフィ」¹¹というコラムで 1 ページという短いパラグラフでのみ言及されているに過ぎなかった。このコラムの問題点としてデンマークポルノ映画がいつ始まったかの特定に至っていない点が挙げられる。また、『北欧映画完全ガイド』の「日本で公開された北欧映画一覧」によると、1970 年代に 15 本ものデンマークポルノ映画が日本で公開されているが、1980 年代以降徐々に公開本数が減少していき、1990 年代以降ほとんど公開されなくなった背景についてコラムでは語られていない。そもそも、『ポルノ・ムービーの映像美学』の中で著者の長澤均は「日本のロマン・ポルノに関する本は数多く出版されているが、洋ものポルノ(洋ピン)に関するまとまった、しかも包括的な歴史研究所は、ほぼまったく出ていない¹¹」と述べていることから、日本のデンマークポルノ映画研究はほとんど進展していないことがわかる。

何故、デンマークポルノ映画研究が進んでいないのか。原因としては 2 つあると考えられる。一つ目は映像資料が入手困難な点にある。日本で VHS または DVD で生産された、1970 年代デンマークポルノ映画は『新わたしは女(Tre slags kærlighed, 1970)』のみである。また、東京国立近代美術館フィルムセンターに問い合わせたところ、『新わたしは女』のみ保有しているとのことだった。また、デンマーク本国でもほとんどビデオ化あるいは DVD 化されておらず、一部の作品のみアメリカで生産されていることが分かった。詰まるところ、研究資料として重要である映像作品を視聴することが困難な点が原因であると考えられる。

二つ目は、上記の原因が故に先行研究が国内外でほとんど進んでいない点だ。実際に、国立図書館に赴き、英語文献を検索したところ 0 件であった。また、Amazon で海外文献を探

11 『ポルノ・ムービーの映像美学』、p410 9~10 行目より引用

したところ該当文献を見つけることができなかった。研究するにあたり、文献が少ないところも問題である。では、本稿はいかにして研究を進めたのか。

一つ目の問題に関しては、基本的にアメリカで DVD が生産されている場合は、輸入をし、DVD が存在しない作品に関しては、動画配信サイトを使い視聴した。まず、本稿で入手することに成功した DVD は『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな日々』、『新わたしは女(Tre slags kærlighed,1970)』、『性私刑(Ride hard ride wild,1971)』、『痴漢ドワーフ(Dværgen,1974)』の 4 本である。『新わたしは女』については DVD-BOX が販売されている為、それを購入し、残りの 3 作品についてはアメリカから輸入した。そして残りは youtube や Smart Sextube、xHamster 等の動画配信サイトを使用した。IT の発達によりユーザがインターネット上に動画を配信する環境が整ったことによって、現在日本では入手困難な作品や海外でも未 DVD 化の作品が視聴可能な状況となっている。このシステムを活かし、『痴情の沼(Whirlpool,1970)』、『歯科医・性の実験報告(Tandlæge,1971)』、『サーカス・ポルノ』、『白昼スワップ・午後の欲情(Da må være en sengekant,1975)』、『淫夢(Nøglehullet,1974)』の 5 本を鑑賞することに成功した。また、残りの日本で公開されたデンマークポルノ映画に関しては近代映画社から出版されている『アダルト洋画チラシカタログ 1970~1988』や写真集『スクリーン・エロティシズム [北欧・日本篇]』、デンマークで出版された『DANSK PORNO/DANISH PORN』等の記述を参照した。尚、今回の研究では映像資料入手困難な状況を受け、扱うデンマークポルノ映画の範囲を日本で公開された作品に限定して研究を行った。

二つ目の問題に関しては、デンマークの映画教会(DFI)の公式ホームページに記載されているデンマーク映画史解説、そして 2012 年に発行されたデンマークポルノ映画についての研究がまとめられている『DANSK PORNO/DANISH PORN』、近代デンマーク映画史について書かれた本『NATIONALE SPEJLINGER Tendenser i ny dansk film』、そして『アダルト洋画チラシカタログ 1970~1988』を中心に参照し、研究を行った。また、欧米各国のアダルト映画事情に関して適宜『ポルノ・ムービーの映像美学』を参照した。次節では、1970 年代デンマークポルノ映画史について掘り下げていく。

3.2 デンマークポルノ映画史の始まりと終焉

この節では、1969 年のデンマークポルノ解禁の理由から、当時のデンマークポルノ事情、世界各国の規制レベルとの比較、そして 1980 年以降次第に規模が縮小されていったデンマークポルノ映画史の終焉について述べる。

デンマークでは 1913 年から映画検閲が政府機関で行われており、1922 年にはシネマ法が制定された。そして、1933 年に犯罪映画とエロチズム映画に対する検閲強化がされており、1969 年に解禁されるまで、映画館で上映する作品はセクシャリティな描写を描けない状況が続いていた。しかしながら、1969 年以前に全くポルノ映画が作られなかった訳では

ない。『素顔のポルノ映画』著者である山田宏一によると、デンマークだけではなく世界的に、ポルノ映画は作られナイトクラブ等の風俗店で密かに上映されていたとのこと。そして、その多くはストーリー性が薄く、性描写も弱かったとのこと。実際、1965 にデンマークで製作された『わたしは女(Jag-en Kvinna,1965)』と同監督シリーズ 3 作目にあたる『新わたしは女』を比較すると、前者は性交シーンを役者の顔にクローズアップし、男女が性交する様子を全体的に魅せることはなかった。しかしながら、後者では解禁後に製作されたこともあり、冒頭から裸の女性のダンスを入れ、性交シーンもカメラは距離を取り全体的に魅せている。演出がより露骨になっている。このように 1969 年以前のデンマークでは、アンダーグラウンドで、しかもソフトなポルノしか作られなかったのだが、3つの理由から 1969 年にデンマークのポルノ映画製作が解禁となる。

一つ目は、デンマーク国内の映画産業が凋落したことにある。DFI によると、第二次世界大戦後、デンマークでは娯楽映画を大量生産するが、1955 年頃から国内でテレビが普及したことで映画産業は打撃を受けた。1954 年の 6000 万チケット販売をピークに、販売数は下降し、1960 年には 4400 万チケット販売と約 27%も下落した。当時の映画産業は国が統括を行っていたこともあり、斜陽に陥ったデンマーク映画産業を、改革する必要があった。

二つ目は、欧米各地でポルノ映画が流行していたことにある。1950 年代アメリカではインディーズ映画界でヌード・ヴァーグという動きがあった。1938 年から 1968 年までプロダクション・コード(ヘイズ・コード)が制定されており、映画の性・暴力描写が自主規制されていたのだが、プロダクション・コードの影響を受けない独立プロダクションでは、ラス・メイヤー監督を中心に『ファスター・プッシーキャット!キル!キル!(Faster PUSSYCAT!KILL!KILL,1965)』、『ワイルド・パーティー(Beyond the Valley of the Dolls,1970)』等のソフトポルノが大量生産され、ヌード・ヴァーグと呼ばれていた。

正式には、アメリカは 1969 年にスウェーデン産『私は好奇心の強い女』の輸入上映が許可となり、1972 年の『ディープ・スロート(Deep throat,1972)』の公開で完全に解禁となった。

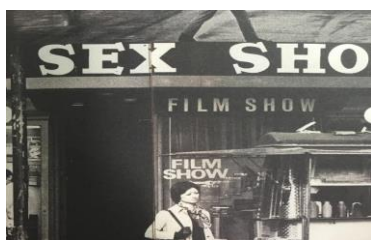
小松弘によるとスウェーデンでは 1950 年代から『春の悶え(Hondansade en sommar,1952)』や『不良少女モニカ(Sommaren med Monika,1953)』などといったポルノ映画が製作されスウェーデン国内だけでなく海外に輸出、日本でも公開されていた。さらに、西ドイツでも 1960 年代後半からポルノ映画の国際展開が始まり日本でもヒットした。つまり、欧米を中心にポルノ映画を生産し、国際展開することで利益増大を図るビジネスモデルが確立されていたと言える。

三つ目は 1967 年にわいせつ文書が解禁されたことである。『性と法律 性表現の自由と限界』の「デンマークにおけるわいせつ文書の解禁(宮澤浩一著)」によると、「第二三四条では『わいせつな文書、図画または物件を公刊しまたは頒布しもしくはこの目的のために製造しまたは輸入した』者は、罰金、拘留、また加重事情の場合には、六ヶ月以下の軽懲役に処せられるという文言がなされていた(第一項第二号)。『十八歳未満の少年に、わいせつ文書、

図画、または物件を提供し、または譲渡した者』にも同じ刑が科されていた(第一項第一号)^{注12}とのこと。1964年に『ファニー・ヒル』のデンマーク語訳出版に関して、わいせつ性を巡る裁判が勃発したものの三度の審級でわいせつ性は否認された。このことをきっかけにポルノグラフィーに関する見解が刑法審議会で討議された。1965年、法廷医師部は「成人の衝動方向が読書や映画で変えられうるということを考えることは出来ないであろう。^{注13}」との見解を発表。同様に心理学者や社会学研究所からもポルノグラフィーが精神的な害を与える危険性は大きくないと結論づけ、1967年6月9日に改正された。この時、ポルノ映画は適用外となっていたが、後のポルノ映画解禁の根拠ともなった。

かくして、デンマークは1969年にポルノ映画の生産を解禁した。そして国際競争下でデンマークポルノ映画は成長していった。他国と違って、デンマークのポルノ解禁はハードコアも含むものであった。山田宏一の『素顔のポルノ映画』によると、「スウェーデンは本場らしく、セックス描写はすべてOK。しかし検閲機関はちゃんとあって、すべての映画が検閲を受けることになっている。つまりセックスはすべて良いが暴力にはうるさく、日本でも大ヒットしたブルース・リーの『燃えよドラゴン』やサム・ペキンパー監督の『ガルシアの首』などが上映中止、という面白い現象を見せている。^{注14}」とのこと。

また『DANSK PORN/DANISH PORN』に掲載されているモーテン・シングの研究によると、デンマークのポルノ映画はポルノ雑誌同様、強烈なヴィジュアルで観客に売り込むことで一気に地位を確立。そして当時の性ビジネスのスタイルを変えた。具体的に、1970年代に官能小説が街から姿を消したのである。人々はポルノマガジンやポルノ映画の視覚的「セックス描写」に身を投じるようになったが故、官能小説のニーズが失われたからだ。また、デンマークポルノ映画は性的補助の役割を担っており、セックス・ショップでは一人で映画を鑑賞できる小部屋が設置されたとのこと。

写真1:セックス・ショップ^{注15}写真2:ポルノ映画館^{注16}

では、何故1990年代以降デンマークポルノは消滅したのだろうか。原因は2つあると考えられる。一つ目はデンマークの映画産業における方針が変更されたからだ。DFIによると、1980年代にデンマークはポルノからアート映画路線へと方向転換したとのこと。理由として映画の製作本数が壊滅的に減ってしまったことにある。1982年には年間7本しか映

12 『性と法律 性表現の自由と限界』、p246 5~8 行目より引用

13 同上、p251 15~16 行目

14 『素顔のポルノ映画』、p225 5~8 行目より引用

15 『DANSK PORN/DANISH PORN』、p217 より写真引用

16 同上、p231 より写真引用

画が製作されなかったとのこと。この事態を受け、政府は若者や映画制作者に対し資金援助をする指針を出し、1982年には資金の25%を援助。1989年には50%もの資金を援助した。デンマーク紙映画評論家モルテン・ピールによると、この補助金制度には下記のような特殊な方法が採用されていたとのこと。

「補助金の半分強は三人の映画コンサルタントの意見に基づいて配分された。三人は委員会を結成したりせず、各プロジェクトについて監督や脚本家、プロデューサーと密接なコンタクトをとったうえで各自が芸術的な観点から判断を下した。これによって、委員会方式では却下されかねない革新的な作品を援助することが可能になった。^{注17}」

つまり、3人の映画コンサルト全会一致で補助金支給の有無を決める訳ではなく、3人の意見を総合的に判断して支給額を決めたのである。実際にラース・フォン・トリアー(Lars von Trier,1956~)監督はスウェーデンの映画評論家スティグ・ビョークマン(Stig Björkman,1938~)との対話の中で、フィルムスクール時代のことに対し「第一に、作りたい映画の費用の心配をしなくてよくなったこと!^{注18}」と発言している。

さらには、テレビ局も映画製作に関わるようになり、ドグマ作品もデンマーク国営放送(DRTV)がプロデュースした。このようにして1980年代以降からデンマークはポルノ映画から芸術映画へと舵を切った結果『バベットの晩餐会(Babettes gæstebud,1987)』、『ペレ(Pelle Erobreren,1987)』で二年連続アカデミー賞外国語映画賞を受賞した。そしてラース・フォン・トリアー監督とトマス・ヴィンターベア(Thomas Vinterberg,1969~)監督を主導としたドグマ95の動きが始まりデンマークは国際映画祭での受賞を目指す芸術映画路線へとメインストリームが移行した。つまり、1980年代以降、デンマークはポルノ映画から国際映画祭での受賞を目指す芸術映画へと注力のベクトルを移行していった結果ポルノ映画ブームに終焉が訪れたと考えられる。

二つ目はインターネットの登場にある。モーテン・シングの研究によると、1990年代にパソコンが一般家庭に普及。それに伴いインターネットポルノが急速に発達した。その結果セックス・ショップや映画館に行かなくとも、ポルノ映画が観られる時代となった。つまり一般的に映画館で観る意味でのポルノ映画の需要がなくなった為消滅したと考えられる。

次節では、実際に作品を分析することでデンマークポルノ映画の特徴を体系化していく。小松弘のポルノ映画に関するコラムによるとデンマーク映画はスウェーデン映画と比べるとコメディ色の強い作品が多いとのこと。しかし、1970年代デンマークポルノを体系化するには弱い特徴である。そこで、本稿では入手可能な映像資料からデンマークポルノ映画を紐解いていく。

17 『アステイオン 56』「デンマーク映画の新たな黄金時代」、p90 上段 18 行目~下段 2 行目より引用

18 『ラース・フォン・トリアー スティグ・ビョークマンとの対話』、p51 14 行目より引用

3.3 デンマークポルノ映画の分類

今回、日本でも公開されたデンマークポルノ映画を中心に研究を行った。1970 年代に日本で公開されたデンマークポルノ映画は以下の 15 本である。『痴情の沼』、『アムール』、『新わたしは女』、『ブルーX 大全集(Danish & Blue,1970)』、『性私刑』、『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな日々』、『歯科医・性の実験報告』、『秘技ポルノ性史』、『WHY?獣色』、『痴漢ドワーフ』、『淫夢』、『ハード・ポルノ/PART.2・悩殺露出狂(THE MORNING AFTER,1973)』、『サーカス・ポルノ』、『白昼スワップ・午後の欲情』、『欲情ブルーガール(The Lovers of Cybthia,1972)』。

今回、9 本の作品を実際に鑑賞して分析、さらに複数の文献から明らかに分析可能な作品 2 本を併せた 11 本について考察したところ、「ドキュメンタリータッチ」「フィクション」のカテゴリーに分類することができた。次項では、1970 年代ポルノ映画を項目別、作品別に分析し、その結果からジャンル映画としてのデンマークポルノ映画を定義づけていく。

3.3.1 ドキュメンタリータッチ

3.3.1.1 『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな日(1970)』

イエンス・イエント・トアセン監督、ポール・バルジャン、ウェイン・ジョン・ロッド出演作。全編フランス語。ヘンリー・ミラーの自伝的小説である『クリシーの静かな日々』の映画化。フランス・クリシーのとあるアパートに住む小説家ジョーイとカメラマン・カールが部屋に次々と女性を連れ込み性交に明け暮れる様子を白黒画面と手持ちカメラによるドキュメンタリー的撮影で描いた作品。

本作は実際にフランスでロケされており、ヌーヴェルヴァーグを意識したありのままの街を映し出している。そして、性描写に関してもカメラが積極的に性交に明け暮れる男と女に迫り、さらにはトイレでの何気ない会話をも撮り収める。

フランスのクロード・シャブロール監督が手がけた、『クリシーの静かな日々(QUIET DAYS IN CLICHY,1990)』と比較すると、2 つの違いがある。

まず一つ目は、美術である。フランス版は豪華絢爛な建物内で、細部までこだわった衣裳を着飾った人々が遊戯に励む娼婦館模様を描くことで、プルーストの『失われた時を求めて』、ソドムとゴモラの章に対するある種の再現を試みている。『失われた時を求めて』のソドムとゴモラの章とは、第一次世界大戦中のフランスを舞台に主人公である「私」が発作を起こし、宿に急遽泊まる話である。そして泊まった宿の部屋の近くから、音が聞こえるので「私」は恐る恐る音のある部屋を覗くと、知り合いのシャルリュス男爵がマゾヒスティックな行為を行っていたことが分かる。さらに、毎晩多額の金額を払って人を雇い、そのような

行為を行っていることを知るという展開になっている。つまり、戦争とは無関係に金と時間を費やす富豪のデカダンスな生活をシャブロール監督は再現しようとしている極めて文学性の高い作品となっている。

一方、デンマーク版では確かに、『失われた時を求めて』を引き合いに出すものの、基本的には低予算ポルノ映画である。ジョーイとカールの出会う敬意を描くこと無く、冒頭から性交シーンが展開される。

二つ目は、ジョーイとカールが性交する場所である。

フランス版では、ジョーイとカールは娼婦館で性に溺れていくことに対し、デンマーク版では娼婦館内部の様子は全く描かれぬ。彼らは街中で女性を捕まえて、部屋におびき寄せて行為に励む点フランス版と明確に相違が生じている。

3.3.1.2 『痴情の沼(1970)』

J.R.ラーラス監督、カール・ランシュバリー、ビビアン・ネーブス、ピア・アンダーソン出演。全編英語。中年女性サラと、彼女と一緒に暮らす写真狂のテオ、そしてサラが連れてきたモデルの女性チュリアとの三角関係を描いた作品。

物語の中心人物が写真狂な為、物語随所に、まるで女性を盗撮・ストーカーしているようなカットがちりばめられている。そして、そのシーンにドキュメンタリータッチが多用されている。本作は、さらに過剰な性描写が特徴となっており、暗室での性交を始め、サラとチュリアの性交をテオが写真に撮り、発情する描写などショッキングなシーンを惜しみなく物語に組み込んでいる。

3.3.1.3 『性私刑(1971)』

エロフ・ペテルソン監督、ブリギット・クロエー、ニッキー・ビュストロム出演、全編英語。プロのバイクレースが、レース中に転倒。その原因はライバルにあると考えた彼が、ライバルのガールフレンドを誘拐し強姦するといった内容。

本作の特徴は、時系列の入れ替えである。時系列順に描くと 1.バイクレース中に事故を起こす 2.勝利したライバルレースが恋人と性交に励む 3.主人公が恋人を誘拐し強姦する 4.恋人が車の中にあつたショットガンで主人公を射殺するという順番である。しかしながら、本作は観客を物語に惹きつける為、2→1→3→4 という順番をとっているのだ。このことで、説明的で冗長になりがちな 1 パートを 2,3 パートの性交シーンでカモフラージュすることができる。

また、本作はドラマ的演出こそあるが、基本的にはドキュメンタリータッチで男と女の性交シーン、バイクレースシーンはありのままの姿で撮影されている。

3.3.1.4 『サーカス・ポルノ(1973)』

フィリス・クロウハウゼン、エーベルハルト・クロウハウゼン監督、ジョージ・デュロイ、スザンヌ・ウォルター出演のデンマーク・スイス合作。全編フランス語。とある田舎町にサーカスがやってくる。そのサーカスは普通のサーカスとは違い、ポルノ専門のサーカスだ。裸の女性による綱渡りから始まり、犬同士の性交為、グループセックス、歯車のような器具を使った自慰等様々な演目を観客に魅せ、観客は大喝采する。公演後には演者たちがサーカス小屋やテントで乱交騒ぎを起こし、仕舞には警察官がやってくる。本作は台詞がほとんどなく、サーカスの数日に渡る公演の様子を、淡々とカメラが追うスタイルとなっている。ほとんどドキュメンタリーといっても過言ではない作品だ。

3.3.1.5 文献より『WHY?獣色(1970)』『秘技ポルノ性史(1971)』

『DANSK PORNO/DANISH PORN』、『アダルト洋画チラシカタログ 1970~1988』、『スクリーン・エロティシズム [北欧・日本篇]』を読むと、いくつかの作品がドキュメンタリータッチであることが分かる。それどころか、本物のドキュメンタリーすら製作された。それは 1970 年に製作された『WHY?獣色』である。フリーセックスの教祖クロウハウゼンに迫ったドキュメンタリーで、馬、牛、犬、豚といった動物との性交を牛小屋だけでなく大学の講堂で実演する作品とのこと。

また、後に『バベットの晩餐会』でアカデミー賞外国語映画賞を受賞するガブリエル・アクセル監督も 1970 年代にドキュメンタリータッチのポルノ映画を製作していた。それは『秘技ポルノ性史』である。本作は、デンマークで実際に行われたポルノ裁判の様子をドキュメンタリーとフィクションシーンを織り交ぜて描いた作品である。

3.3.2 フィクション

3.3.2.1 『新わたしは女 (1970)』

マック・アールベリー監督、グン・ファルク、インゲル・サンド、トム・スコット出演。全編英語。スウェーデン・デンマーク合作。後にアメリカに渡り『ゾンバイオ/死霊のしたたり(RE-ANIMATOR,1985)』、『ビバリーヒルズ・コップ 3(Beverly Hills Cop III,1994)』等の撮影監督となったマック・アールベリー監督が 1967 年からスウェーデ

ン・デンマーク共同で製作した『わたしは女』シリーズ最終章。看護婦シブの乱交を目撃した娘が、ショックのあまり家出をするという内容。

デンマークで正式にポルノ映画の製作及び上映が解禁となった直後の作品な為、タブーや従来作られていたポルノ映画に挑戦した内容となっている。まず、冒頭タイトルシーンで4分15秒と非常に長い尺をかけてサイケデリックな色調の中で裸の女性が踊る描写を挿入している。そして、母の乱交を目撃しショックを受けた娘が家出する先はヒッピーのたまり場である。そこでヒッピーになろうとするものの、彼らにレズビアンだと勘違いされ苛められる。そしてある黒人医師に救われる。娘は様々なトラウマから、男性を信用できなくなり、医師の相棒である女性に愛を抱き、レズビアンに目覚めるのだ。そして彼女と性交を始める。最終的に、娘は男性を信じるようになり、黒人医師と結婚し物語は終わる。徹底的な性描写に、女性同士、異人種間の愛を描く一昔前までは描けないような作品作りとなっている。

3.3.2.2 『歯科医・性の実験報告(1971)』

ヨーン・ヒルバルド監督、ペルテ・トーフエ、アニエ・ブリギット・ガルデ出演作。全編デンマーク語。歯科医大の研究生が叔母から遺産を譲り受けることとなる。それをきっかけに遺産目当ての同級生や先輩から色仕掛けで迫られる。また、友人からも事業に投資させようと振り回される。そして研究生が本当に好きな女子大生との仲が深まらず悩むという内容である。

歯科医大という設定を活かし、診察台での性交シーンを多めに挿入されている。そして、本作では男目線だけではなく、主人公を奪い合う女たち目線を描くことで単なるポルノ映画としてではなく、愛憎劇に昇華させようという気概が感じられる作品である。

3.3.2.3 『痴漢ドワーフ(1974)』

ヴィダル・ラスキ監督、トルベン・ビレ、アンヌ・スパロウ出演、全編英語、デンマーク・アメリカ合作。背の低い男が、下宿に女性を連れ込み、下宿の管理人と共謀し、監禁するサスペンスポルノ。物語性が強い一方、性交シーンは非常に少なく、男性器も女性器もカメラに映し出されることはない。しかしながら、官能シーンが薄いわけではない。女性が腰を振りながら、魅了する官能的な着替えシーンや監禁シーンでは、女性の手を固定するだけではなく、注射器で薬物漬けにした状態での性交シーンなど、官能シーンの手数を増やす工夫がされており、他の作品に負けず劣らず強烈なイメージが演出されている。また、劇中にミュージカルシーンがあることも特徴的である。故に、本作は単なる性

の欲求を解消するだけの映画ではなく、物語性を付加したポルノ映画であることが伺える。

3.3.2.4 『淫夢(1974)』

ゲルハルト・ブルセン監督、マリー・エコレ、ビア・ラルセン出演作。全編デンマーク語。本作は性欲が激しいプロデューサーが自分の娘の恋人に、様々な性生活をレポートさせる内容である。

一番の特徴はミュージックビデオのような編集がされている点である。タイトルシーンでは、ロックミュージックと役者の動きをシンクロさせる。そして、劇中では早回しを使ったコミカルな性交シーン、ロックだけでなく、ジャズや甘いメロディーと性交をシンクロさせた演出が展開されている。ストーリーよりもヴィジュアル重視な作品である為、一般的な男と女の性交シーンを始め、女性同士の性交、グループセックス、そしてカメラマンに撮影されながらの性交と手数の多さが特徴的となっている。

3.3.2.5 『白昼スワップ・午後の欲情(1975)』

ヨーン・ヒルバルド監督、ビビ・ラウ、アンナ・ビー出演作。全編デンマーク語。性癖の激しいサラリーマンである夫に耐えきれなくなり、妻は実家に帰省する。夫は妻のことを気にもとめず次々と女を連れ込み性交に励む。一方、妻は実家に帰ると、両親が隣家の夫婦とスワッピングを繰り広げていたことにショックを受け、街を放浪。出会った見知らぬ男と性交に励むという話。

本作では、サラリーマンである主人公の変わった性交・性癖を魅せていく。まず、妻が実家に帰った直後のシーン。サラリーマンは妻に嫌われたことを気にも留めず、友人を自宅に招く。そしてベッドに鏡を取り付けたことを自慢し始め、成功中の自分を鏡で見ることができると語る。本作では彼の性癖がどんどん過激になっていく様子を観ることができ、物語も終盤になると、占い師を呼び始める。占い師にカードと蝋燭を使った儀式を行ってもらい、占い師の前で彼は連れ込んだ新しい女と性交に励むのである。

また、本作にはサラリーマンという設定を活かした見せ場もある。日本人ビジネスマン相手に商談をするという場面。緊張感溢れる商談にも関わらず、主人公は彼らに見せる写真を誤って、女性器の写真を見せてしまう失態をしてしまう。修羅場を迎えるものの、最終的に日本人から好感度を獲得し商談を成立させる。

3.3.3 1970 年代デンマークポルノ映画総括

1970 年代デンマークポルノ映画は、主にドキュメンタリータッチとフィクションの 2 つの軸を持っていることが今回の研究で浮かび上がった。そして、いずれの時代も共通して、検閲時代からの解放による自由な作りをしている為、いくなれば実験映画の側面が如実に表れている。『サーカス・ポルノ』のようにドラマ性を排して、ドキュメンタリーに限りなく近づける。『性私刑』のように、時系列を入れ替え、物語の前半に性的シーンを多く盛り込む。さらには、劇映画という枠組みを超えてドキュメンタリーとして獣と性交する夫婦を撮る等、どのような作品であれ旧来の映画作品では決して演出されることのない技術が多数盛り込まれている。

そして、その技術合戦により 1970 年代のデンマークポルノは過激性を伴っていた。確かに、『性私刑』、『痴漢ドワーフ』といった作品のように男性器、女性器がほとんど映らないソフトポルノも存在する。しかしながら、これらの作品も物語が進行するうちに、一対一の成功から、一対多数によるグループセックスへと移り変わる。また拘束具が登場し、強姦に等しい行為がなされるため、過激なポルノと言及しても過言ではない。

1970 年代にデンマークポルノ映画が流行したことは、国民にも少しずつ過激な描写が受け入れられてきたのでは。1990 年代以降、ドグマ 95 映画を始めとして過激な暴力映画がデンマーク映画史のメインストリームを流れた原因は 1970 年代にあるのではと考察することができる。次節では、1970 年代デンマークポルノ映画がデンマーク映画史に与えた影響について考察していく。

3.4 ドグマ 95 映画の影響

1970 年代デンマークポルノは、ドグマ 95 にどのような影響を与えたのだろうか。この節では、1970 年代デンマークポルノがドグマ 95 に与えた影響を考察していく。1980 年代のデンマーク映画界は、ポルノ映画からアート映画復活のプロセスにあった為、作品のテイストは 1970 年代デンマークポルノ映画と大きく乖離している。しかしながら、1990 年代に始まったドグマ 95 の作品を観ると明らかに、1970 年代のデンマークポルノ映画に対するある種の批評がなされている。

証拠として、モーテン・シングは『DANSK PORNO/DANISH PORN』の「Afterplay」の章でラース・フォン・トリアー監督の『イディオッツ』を引き合いに、後世の代表的デンマーク映画の性描写に影響を与えたと述べている。彼はこれらの作品内で描かれる性的イメージに対し「it has become fairly common to slip sexual fantasies or descriptions of a sexual nature into the story.(性的幻想や性的性質の記述をストーリーに取り込むこと

は、かなり一般的になっています)¹⁹と述べている。確かに、『イディオッツ』に関して、1970年代デンマークポルノ映画にあるようなドキュメンタリータッチと過激な性描写を踏襲しつつも、よりこれらの技法や描写は物語と密接に関わっている。そして、カンヌ国際映画祭やベルリン国際映画祭に出品され、芸術映画として評価されている。しかし『イディオッツ』に関し、ラース・フォン・トリアー監督はスティーグ・ビョークマンとの対話で、デンマークポルノ映画からの影響について述べていない。さらに、彼は映画製作において確かに、『沈黙(Tystnaden, 1963)』というイングマール・ベルイマン(Ingmar Bergman, 1918~2007)が製作したポルノ映画を参照にしている。しかし、ベルイマン含め、エーリッヒ・フォン・シュトロハイム(Erich von Stroheim, 1885~1957)、アンドレイ・タルコフスキー(Andrei Tarkovsky, 1932~1986)等、作品レベルでは『愛の嵐(II Portiere di notte, 1975)』、『鏡(ЗЕРКАЛО, 1975)』といった映画研究本でお手本とされるような監督、作品を参考にしている。つまり、モーテン・シングの理論はさらに掘り下げる必要がある。そこで本稿では、1970年代デンマークポルノ映画とドグマ 95 の関係性について3つの側面から、掘り下げていくことでドグマ 95 に与えた影響を明らかにしていく。

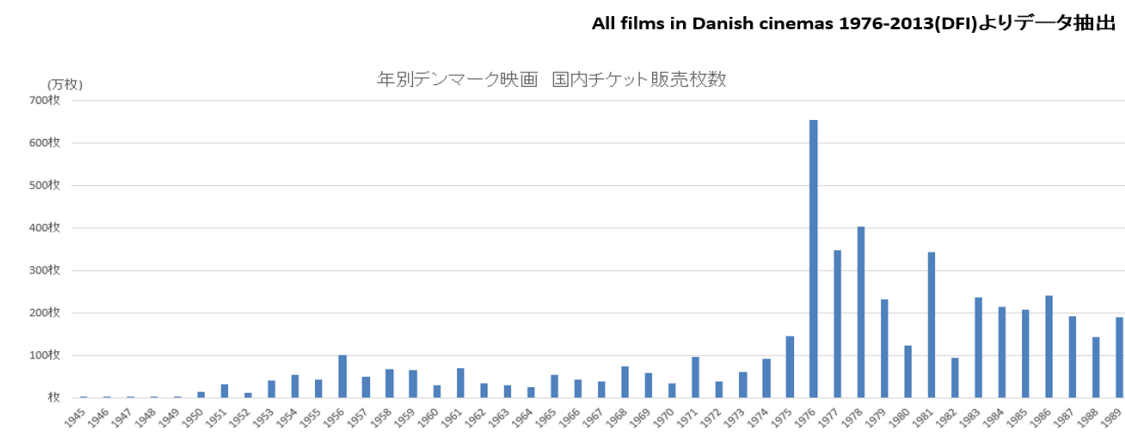
まず一つ目は、ドグマ映画の批評性についてである。『現代映画用語事典』の「ドグマ 95」の説明によると、「”今日の映画に見られるある種の傾向に対抗する映画救済運動”として、撮影過程の不純物を取り除いた映画作りを行ない、ストーリーや俳優の演技に注目させることを意図する。²⁰」と述べられている。当然ながらハリウッド大作のような過剰な特殊効果やセットを使った映画作りに対する批評だけでなく、デンマーク国産映画に対する批評も当然なされていたはずである。確かに、ドグマ 95 の作品群は「2.2 ドグマ 95 とデンマーク」で述べたように、ジャンル映画ではない。物語におけるベクトルは存在しない。しかしながら、大衆映画に対する批判的視線は共通して存在する。1970年代のデンマークポルノ映画の特徴として挙げたドキュメンタリータッチ。この技法は低予算映画として必然的に登場する手法である。1970年代デンマークポルノ映画のドキュメンタリータッチは物語における必要性はさほどなかった。一方、ドグマ 95 の作品について分析すると、例えば『セレブレーション』や『イディオッツ』にはドキュメンタリータッチの必然性がある。『セレブレーション』ではドキュメンタリータッチにすることで、ある一家の絆が崩壊していく様子を演劇に近い状態で描くことができる。そして、演劇よりも広い空間を使うことができ、観客に没入感を与える。『イディオッツ』では、障がい者になりすます集団をドキュメンタリータッチで描くことで、障がい者に対する社会の偽善・欺瞞をより一層浮き彫りにすることができる。つまりドグマ 95 には、1970年代デンマークポルノ映画に対する批評がなされていると考えられる。

¹⁹ 『DANSK PORNO/DANISH PORN』、p324 左 45~47 行目より引用

²⁰ 『現代映画用語事典』、p103 右段 23 行目~28 行目より引用

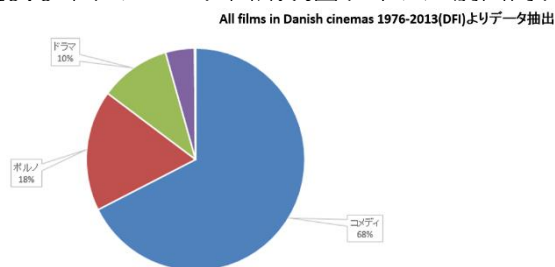
2 つ目は、1970 年代デンマークポルノの過激性・実験性が一般化していたが為にドグマ 95 の過激な描写が国内外で受け入れられた点である。先述の通りデンマークポルノはポルノ映画先進国であるスウェーデンですら許されていなかった暴力に関しても寛容であった。故に『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな生活』のように強姦に近い性交を描写、『痴漢ドワーフ』のような監禁描写、そして強姦・監禁に加えショットガンによる顔面損壊を描いた『性私刑』などが作られた。この手の作品が、街中で鑑賞できる。つまりはデンマークの生活のすぐそばにハードコアなポルノが存在していたと言える。その結果、デンマーク人にとって過激で実験的な描写はありふれた手法として存在していたのではないだろうか。また、国外から見ても 1970 年代のデンマークポルノの過激で自由な作風が一般化していたのではないだろうか。つまりドグマ 95 が国内外から評価を受けた理由として、1970 年代デンマークポルノが土台としてあったからといえる。

図 1:年別デンマーク映画国内チケット販売枚数推移^{注21}



また、図 1 から分かりますとおり、1969 年にポルノ解禁になって以後、デンマークにおける国内チケット販売枚数が伸びており、1976 年には 60 年代のチケット販売枚数の約 10 倍近くまで伸びている。さらに 60 年代の 1 年間で製作される映画本数の平均が 15 本に対し 70 年代では 19.1 本と約 21%上昇していることもわかる。

図 2:1976 年デンマーク国産映画ジャンル別国内チケット販売枚数割合^{注22}



21 『All films in Danish cinema 1976-2013』よりデータ抽出

22 同上

そして、ピーク時の 1976 年デンマーク国産映画の国内チケット販売枚数をジャンル別に分類すると、コメディ映画 68%、ポルノ映画 18%、ドラマ 10%、その他 4%である。ポルノ映画の国内チケット販売枚数が全体の約 20%と大部分を占めていることから、デンマーク国内でもポルノ映画大国としての基盤が 1970 年代に完成していたことが分かる。

3 つ目は、1970 年代デンマークポルノ映画の「規則による自由さ」がそのままドグマ 95 に続いている点である。越川道夫は『ユリイカ 2014 年 10 月号』の「ドグマ 95 と『遊び』」という小論で、フランスのヌーヴェルヴァーグとの比較を行っている。この記事をもとめると、ヌーヴェルヴァーグはスタジオセットから映画を開放し、ロケーションや即興的演出等を交えた自由な映画作りにより「職人」から「作家」へ映画監督を引き上げた。それと同時にヌーヴェルヴァーグは「個人的映画」の要素を強めた。一方、ドグマ 95 は「純血の誓い」という規則を元に自由に映画を作ることで、「個人的映画」からの脱却を図ったとのこと。

このポスト・ヌーヴェルヴァーグなドグマ 95 の動きは既に 1970 年代デンマークポルノ映画から存在していた。「純血の誓い」のような規則は存在しないが、1)10 分に一度の性交シーン 2)グループセックスや同性による性交描写 3)コメディタッチ 4)2 時間以内の物語 と一定の規則を基に自由な作品が多数生み出された。また 1970 年代デンマークポルノ映画とヌーヴェルヴァーグを比較すると、前者は明らかに「個人的映画」からの脱却を図っている。元々、デンマーク国内の映画産業が斜陽に陥っていたため、生まれたジャンルである故、ストーリーないし性交という名のアクションを重視することで観客動員を増やそうとした。故に自由な作風ながらも、若干の規則を映画内に設けることで観客を意識した作品が作られた。同様にドグマ 95 も、国内外の映画を批判的に考察した「純血の誓い」によって、自由ながらも規則ある映画作りを行い観客に訴えかけている。

つまるところ、デンマーク映画史におけるニューウェーブであるドグマ 95 の「規則による自由さ」は 1970 年代デンマークポルノの時代から存在していたのである。

第 4 章 結び

本稿では、入手できるごく僅かな映像資料、文献及び論文を基に知られざる 1970 年代デンマークポルノ映画の影響を明らかにした。その結果として判明したのは、1970 年代デンマークポルノ映画が国内外で成功を収めた結果、過激描写や自由な作風が大衆化され、「ドグマ 95」の過激で実験的な演出が国内外でも自然な形で浸透していったという点である。

本稿では日本において前例のない研究を行ったため、入手できたデンマークポルノ映画は全体のほんの一部に過ぎない。しかしながら、実際に視聴した 9 本と、デンマークの文献による研究を行うことで、ジャンル映画としてのデンマークポルノ映画の特徴と、デンマーク映画史におけるこれらの作品の役割が浮き上がってきた。

本稿で確実に断言できることはカール・テオドール・ドライヤーやベンヤミン・クリステ

ンセンが活躍した映画史初期と国際的注目が再び集まった 1980 年代後半以降のデンマーク映画との間にある空白の約半世紀について明らかになったこと。特に、1970 年代から後世への橋となるものが浮き上がったことである。これはデンマーク映画史研究として大きな一歩であろう。

しかしながら、1980 年代にデンマークの映画業界の方向性をポルノから芸術に転向したことや、1970 年代デンマークポルノ映画とデンマーク国民との関係性についてまだまだ掘り下げていく必要があるが、これらは本稿の続きとして別の機会に譲ることにしたい。

本研究を進めるにあたり、ご指導頂いた卒業論文指導教員のリービ英雄教授、また資料提供して頂いたシネマズ by 松竹で映画ライターをされている滝口明氏に感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いたリービ英雄ゼミの皆様にも感謝致します。

注

1. 『「生活大国」デンマークの福祉政策』、村武夫著、ミネルヴァ書房、2010 年 6 月 25 日、p2、7~16 行目より引用
2. 『デンマークの歴史・文化・社会』、浅野仁、牧野正憲、平林孝裕編、創元社、2006 年 3 月 10 日出版、p15 23 行目~p16 6 行目より引用
3. 『「生活大国」デンマークの福祉政策』、野村武夫著、ミネルヴァ書房、2010 年 6 月 25 日、「社会福祉国家としての発展・近代化と工業化を基盤として」、p19 20~21 行目より引用
4. 『WORLD HAPPINESS REPORT』、John Helliwell, Richard Layard, Jeffrey Sachs 編を参照
2012 年
<http://www.earth.columbia.edu/sitefiles/file/Sachs%20Writing/2012/World%20Happiness%20Report.pdf>
2013 年
http://unsdsn.org/wp-content/uploads/2014/02/WorldHappinessReport2013_online.pdf
2015 年
<http://www.theglobeandmail.com/news/national/article24073928.ece/BINARY/World+Happiness+Report.pdf>
2016 年
http://worldhappiness.report/wp-content/uploads/sites/2/2016/03/HR-V1_web.pdf
(2016 年 8 月 16 日最終閲覧)
5. 『デンマークを知るための 68 章』、村井誠人編著、明石書房、2009 年 6 月 30 日、「デンマーク映画と現代(小松弘著)」、p290 6~8 行目より引用
6. 『際立つ構成-デンマークのサイレント映画における視覚的モデルとしての絵画の使

- 用(カスパーチューベア著)』、演劇映像学演劇博物館グローバル COE 紀要/報告集、
2010 年 1 月号、p102 33 行目~p103 2 行目より引用
7. 『北欧映画 完全ガイド』、小松弘監修、渡辺芳子責任編集、新宿処方出版、
2005 年 9 月 20 日、p194 下段 22 行目~p195 上段 5 行目より引用
 8. 『ドキュメンタリー映画史』、エリック・バーナウ著、p165 下段 19 行目~p166 上段 1
行目より引用
 9. 『北欧映画 完全ガイド』、小松弘監修、渡辺芳子責任編集、新宿処方出版、
2005 年 9 月 20 日、p68 4 段目 19~20 行目より引用
 10. 『現代映画用語事典』、山下慧&井上健一&松崎健夫著、キネマ旬報社、
2012 年 5 月 28 日、p103 右段 42 行目~p104 左段 12 行目より引用
 11. 『ポルノ・ムービーの映像美学 エディソンからアンドリュー・ブレイクまで
視線と扇状の文化史』、中澤均著、彩流社、2016 年 6 月 25 日
p410 9~10 行目より引用
 12. 『性と法律 性表現の自由と限界』、「資料 デンマークにおけるわいせつ文書」、中澤
浩二著、成文堂、1972 年 8 月 10 日、p246 5~8 行目より引用
 13. 同上、p251 15~16 行目
 14. 『素顔のヨーロッパポルノ映画』、山田宏一著、近代映画社、1976 年 4 月 15 日、
P225 5~8 行目
 15. 『DANSK PORNO/DANISH PORN』,Jon Nordstrøm,Morten Thing,Ole
Lindboe,Jack Stevenson,Torben Andersen,Søren E.Jensen 著,p217 より写真引用
 16. 同上、p231 より写真引用
 17. 『アステイオン 56』、ティビーエス・ブリタニカ出版、2001 年 11 月 30 日、
「デンマーク映画の新たな黄金時代(モルテン・ピール著)」、
p90 上段 18 行目~下段 2 行目より引用
 18. 『ラース・フォン・トリアー スティーグ・ビョークマンとの対話』、ラース・フォ
ン・トリアー&スティーグ・ビョークマン著、オスターグレン晴子訳、水声社、2001
年 1 月 10 日、p51 14 行目より引用
 19. 『ポルノ・ムービーの映像美学 エディソンからアンドリュー・ブレイクまで
視線と扇状の文化史』、中澤均著、彩流社、2016 年 6 月 25 日
p203 15~16 行目より引用
 20. 『現代映画用語事典』、山下慧&井上健一&松崎健夫著、キネマ旬報社、
2012 年 5 月 28 日、p103 右段 23 行目~28 行目より引用
 21. 『All films in Danish cinema 1976-2013』よりデータ抽出
 22. 同上

参考資料

1. 文献

- ・『アステイオン 59』、ティビーエス・ブリタニカ出版、2001 年 11 月 30 日

- ・『映画検定 公式テキストブック[増補改訂版]』、キネマ旬報映画総合研究所編、キネマ旬報、2012 年 2 月 28 日
- ・『永久保存版・アダルト洋画チラシカタログ 1970-1988(別冊スクリーン増刊)』、1989 年、近代映画社
- ・『会社四季報 業界地図 2016 年版』、山縣裕一郎発行、東洋経済新報社、2015 年 9 月 10 日
- ・『現代映画用語事典』、山下慧&井上健一&松崎健夫著、キネマ旬報社、2012 年 5 月 28 日
- ・『素顔のヨーロッパポルノ映画』、山田宏一著、近代映画社、1976 年 4 月 15 日
- ・『スクリーン・エロティシズム [北欧・日本篇]』、児玉教夫著、右文書院、2008 年 12 月 15 日
- ・『「生活大国」デンマークの福祉政策』、野村武夫著、ミネルヴァ書房、2010 年 6 月 25 日
- ・『性と法律 性表現の自由と限界』、宮澤浩一、中山研一編、成文堂、1972 年 8 月 10 日
- ・『痴情の沼』劇場公開時パンフレット、1970 年
- ・『デンマーク国民をつくった歴史教科書』、ニコリーネ・マリーイ・ヘルムス著、村井誠人&大溪太郎訳、彩流社、2013 年 2 月 28 日
- ・『デンマークの歴史・文化・社会』、浅野仁、牧野正憲、平林孝裕編、創元社、2006 年 3 月 10 日出版
- ・『デンマークの歴史教科書』、イェンス・オーイエ・ポールセン著、錢本隆行訳、明石書店、2013 年 9 月 20 日
- ・『デンマークを知るための 68 章』、村井誠人編著、明石書房、2009 年 6 月 30 日
- ・『ドキュメンタリー映画史』、エリック・バーナウ著、安原和見訳、筑摩書房、2015 年 1 月 10 日
- ・『クリシーの静かな日々』、ヘンリー・ミラー著、小林美智訳、水声社、2004 年 5 月 10 日
- ・『北欧映画 完全ガイド』、小松弘監修、渡辺芳子責任編集、新宿処方出版、2005 年 9 月 20 日
- ・『北欧の世界観』、K・ハストロプ編、菅原邦城&新谷俊裕訳、東海大学出版会、1996 年 5 月 16 日
- ・『ポルノ・ムービーの映像美学 エディソンからアンドリュー・ブレイクまで 視線と扇状の文化史』、中澤均著、彩流社、2016 年 6 月 25 日
- ・『まずはこれだけ デンマーク語』、国際語学社、2006 年 6 月 24 日
- ・『もっと知りたい 魅惑のデンマーク』、岡田眞樹著、新評論、2012 年 6 月 30 日
- ・『ユリイカ 2014 年 10 月号』、青土社、2014 年 9 月 27 日
- ・『ラース・フォン・トリアー スティグ・ビョークマンとの対話』、

- ラース・フォン・トリアー&スティーグ・ビョークマン著、
オスターグレン晴子訳、水声社、2001 年 1 月 10 日
- ・『501 映画監督』、スティーヴ・ジェイ・シュナイダー編、講談社、
2009 年 4 月 6 日
 - ・『501 映画スター』、スティーヴ・ジェイ・シュナイダー編、講談社、
2009 年 4 月 6 日
 - ・『DANSK FILM UNDER NAZISMEN』,Lars-Martin Sørensen 著、
ScandBook,2014,デンマーク
 - ・『DANSK PORNO/DANISH PORN』,Jon Nordstrøm,Morten Thing,Ole
Lindboe,Jack Stevenson,Torben Andersen,Søren E.Jensen
著,NORDSTROMS,2012,デンマーク
 - ・『REALISMEN I DANSK FILM』,Birger Langkjær 著,Samfundets litteratur,2012 年,
デンマーク

2. 論文

- ・『際立つ構成-デンマークのサイレント映画における視覚的モデルとしての絵画の使用』、カスパーチューベア著、演劇映像学演劇博物館グローバル COE 紀要/報告集掲載、早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム紀要編集委員会編、
2010 年 1 月号
- ・『デンマークから遠く離れて/デンマーク映画の或る種の傾向と日本におけるその受容』、西村安弘著、東京工芸大学芸術学部映像学科、2003 年 1 月 18 日
- ・『ベンヤミン・クリステンセン デンマーク映画黄金時代の巨匠の生涯』、
ヨハン・ノルドストロム著、映画論叢、国書刊行会出版、2012 年 2 月 3 日
- ・『NATIONALE SPEJLINGER Tendenser I ny dansk film』,
Anders Toftgaard, Ian Halvdan Hawkesworth 著、
Museum Tusulanums Forlag,2003

3. インターネット

- ・「外務省 デンマーク王国基礎データ」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/denmark/data.html>
(2016/01/04 最終閲覧)
- ・「地球の歩き方 ロシアの天気&服装ナビ」
<http://www.arukikata.co.jp/weather/RU/>
(2016/01/04 最終閲覧)
- ・ドグマ 95 公式サイト
<http://www.dogme95.dk/>

(2016/9/29 最終閲覧)

- ・ CiNii, 『デンマーク 映画』 検索

<http://ci.nii.ac.jp/search?q=%E3%83%87%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%80%80%E6%98%A0%E7%94%BB&range=0&count=20&sortorder=1&type=0>

(2015 年 12 月 4 日閲覧)

- ・ DANMARKS STATISTIK(デンマーク統計局), 『Biografer og film(映画館と映画)』

<https://www.dst.dk/da/Statistik/emner/film-boeger-og-medier/biografer-og-film>

(2016 年 6 月 26 日最終閲覧)

- ・ DET DANSKE FILMINSTITUT(デンマーク映画協会)、

<http://www.dfi.dk/> (2016 年 8 月 16 日閲覧最終閲覧)

- ・ FESTIVAL SCOPE(インディーズ映画検索&閲覧サービス)

<https://www.festivalscope.com/> (2015 年 12 月 8 日最終閲覧)

- ・ Newsweek 日本版「デンマーク 『難民にとって魅力のない国を目指して』

(2015/9/8)」、

<http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2015/09/post-3903.php>

(2016/1/9 最終閲覧)

- ・ 「WORLD HAPPINESS REPORT」、John Helliwell, Richard Layard,

Jeffrey Sachs 編

2012 年

<http://www.earth.columbia.edu/sitefiles/file/Sachs%20Writing/2012/World%20Happiness%20Report.pdf>

2013 年

http://unsdsn.org/wp-content/uploads/2014/02/WorldHappinessReport2013_online.pdf

2015 年

<http://www.theglobeandmail.com/news/national/article24073928.ece/BINARY/World+Happiness+Report.pdf>

2016 年

http://worldhappiness.report/wp-content/uploads/sites/2/2016/03/HR-V1_web.pdf

(2016/6/27 最終閲覧)

- ・ 『All films in Danish cinema 1976-2013』、DFI 発行、

<http://www.dfi.dk/Service/English/Films-and-industry/Facts-og-Stats/Search-options-at-Statistics-Denmark.aspx>

(2016/12/06 最終閲覧)

4. 映画

- ・『悪党に粛清を(THE SALVATION,2015)』、クリスチャン・レヴリング監督
- ・『アクト・オブ・キリング(The Act of Killing,2012)』、ジョシュア・オッペンハイマー監督
- ・『ある戦争(Krigen,2015)』、トビアス・リンホルム監督
- ・『アンチクライスト(Antichrist,2011)』、ラース・フォン・トリアー監督
- ・『怒りの日(Vredens dag,1943)』、カール・テオドール・ドライヤー監督
- ・『偽りなき者(Jagten,2012)』、トマス・ヴィンターベア監督
- ・『異常性欲アニタ(Anita,1973)』、トーニー・ウィックマン監督
- ・『淫夢(Nøglehullet,1974)』、ゲルハルト・プールセン監督
- ※xHamsterにて視聴
- ・『イデオッツ(Idioterne,1998)』、ラース・フォン・トリアー監督
- ・『インタビュー(Interview,2000)』、ピヨン・ヒョク監督
- ・『オンリー・ゴッド(Only God Forgives,2013)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『奇跡(Ordet,1954)』、カール・テオドール・ドライヤー監督
- ・『キング・イズ・アライヴ(THE KING IS ALIVE,2000)』、クリスチャン・レヴリング監督
- ・『キングダム(Riget,1994~1997)』、ラース・フォン・トリアー監督
- ※テレビシリーズ
- ・『クリシーの静かな日々(QUIET DAYS IN CLICHY,1990)』、クロード・シャブロール監督
- ・『工場の出口(La Sortie de l'usine Lumière à Lyon,1895)』、リュミエール兄弟監督
- ・『サーカス・ポルノ(La foire aux sexes,1973)』、フィリス・クロンハウゼン、エーベルハルト・クロンハウゼン監督、
- ※Smart Sextubeにて視聴
- ・『裁判長(Præsidenten,1918)』、カール・テオドール・ドライヤー監督
- ・『サタンの書の数頁(BLADE AF SATANS BOG,1919)』、カール・テオドール・ドライヤー監督
- ・『裁かるゝジャンヌ(La Passion de Jeanne d'Arc,1927)』、カール・テオドール・ドライヤー監督
- ・『しあわせな孤独(Elsker dig for evigt,2002)』、スサンネ・ビア監督
- ・『幸せになるためのイタリア語講座(Italiensk for begyndere,2001)』、ローネ・シェアフィ監督
- ・『歯科医・性の実験報告(Tandlæge,1971)』、ヨーン・ヒルバルド監督
- ※youtubeにて視聴
- ・『ジュリアン(Julien: Donkey Boy,1999)』、ハーモニー・コリン監督

- ・『新わたしは女(Tre slags kærlighed,1970)』、マック・アフルベルイ監督
- ・『性私刑(Ride hard ride wild,1971)』、エロフ・ペテルソン監督
- ・『セレブレーション(Festen,1998)』、トマス・ヴィンターベア監督
- ・『続わたしは女(JEG-EN KVINDE II, 1968)』、マック・アフルベルイ監督
- ・『ダンサー・イン・ザ・ダーク (Dancer in the Dark,2000) 』、
ラーズ・フォン・トリアー監督
- ・『痴漢ドワーフ(Dværgen,1974)』、ヴィダル・ラスキ監督
- ・『痴情の沼(Whirlpool,1970)』、ホセ・ラモン・ラルラス監督
- ・『沈黙(Tystnaden,1963)』、イングマール・ベルイマン監督
- ・『ドッグヴィル(Dogville,2003)』、ラーズ・フォン・トリアー監督
- ・『ドライブ(Drive,2011)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『ニンフォマニアック(Nymphomaniac,2013)』、ラーズ・フォン・トリアー監督
- ・『白昼スワップ・午後の欲情(Da må være en sengekant,1975)』、
ヨーン・ヒルバルド監督 ※youtube にて視聴
- ・『バベットの晩餐会(Babettes gæstebud,1987)』、ガブリエル・アクセル監督
- ・『ヴァルハラ・ライジング(Valhalla Rising,2009)』、
ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『ヒトラーの忘れもの(Under Sandet,2015)』、マーチン・ピータ・サンフリト監督
- ・『ファスター・プッシーキャット キル! キル!
(Faster, PUSSYCAT! KILL! KILL!,1965)』、ラス・メイヤー監督
- ・『プッシャー(Pusher,1996)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『プッシャー2(Pusher II,2004)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『プッシャー3(Pusher III, 2005)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『不良少女モニカ(Sommaren med Monika,1953)』、
イングマール・ベルイマン監督
- ・『ブロンソン(Bronson,2008)』、ニコラス・ウィンディング・レフン監督
- ・『ペレ(Pelle Erobreren,1987)』、ビレ・アウグスト監督
- ・『ヘンリー・ミラーの性生活/クリシーの静かな日々(Stille dage Clichy ,1970)』、
イェンス・ヨルゲン・トルセン監督
- ・『魔女(HAXAN,1922)』、ベンヤミン・クリステンセン監督
- ・『ミフネ(Mifunes sidste sang,1998)』、ソーレン・クラーク=ヤコブセン監督
- ・『未来を生きる君たちへ(Hævnen,2011)』、スサンネ・ピア監督
- ・『メイキング・オブ・ドッグヴィル~告白~(Dogville Confessions,2003)』、サミ・マー
ティン・サイフ監督
- ・『メランコリア(Melancholia,2009)』、ラーズ・フォン・トリアー監督
- ・『モルグ/屍体消失(Nattevagten,1994)』、オーレ・ボールネダル監督

- ・『ヨーロッパ(Europa,1991)』、ラース・フォン・トリアー監督
- ・『ラース・フォン・トリアーの 5 つの挑戦(De fem benspænd The Five,2003)』、ラース・フォン・トリアー&ヨルゲス・レス監督
- ・『ラヴァーズ(LOVERS,1999)』、ジャン=マルク・バル監督
- ・『ルック・オブ・サイレンス(The Look of Silence,2014)』、ジョシュア・オッペンハイマー監督
- ・『ロイヤル・アフェア 愛と欲望の王宮(En kongelig affære,2012)』、ニコライ・アーセル監督
- ・『ワイルド・パーティー(Beyond the Valley of the Dolls,1970)』、ラス・メイヤー監督
- ・『わたしは女(Jag-en Kvinna,1965)』、マック・アフルベルイ監督
- ・『私は好奇心の強い女(Jag är nyfiken-gul,1967)』、ヴィルゴット・シューマン監督
- ・『Bridgend(2015)』、ジャップ・ロンド監督
- ・『Denmark Fights for Freedom(1944)』、デンマーク・レジスタンス製作
- ・『THE GOOD LIFE(2015)』、エヴァ・ムルヴァド&モルテン・ランマル監督
- ・『Kørsel med grønlandske Hunde(1897)』、ペター・エルフェルト監督
- ・『Pornography in Denmark(1970)』、アレックス・デレンジー監督、※xHamsterにて視聴
- ・『SERENA(2014)』、スサンネ・ピア監督